剣と能

神谷　昌宏

能を鑑賞するようになって久しい。金沢の能楽堂で観たのがそのはじめである。シテ方はもちろんワキ方ならびに囃方の協調によって醸し出される心地よい緊張感が、約２時間の公演中ずっと持続したのを鮮明に覚えている。当時すでに剣道を始めて相当の年月が過ぎており、剣道における縁や間といったものも未熟ながら感じられるようになっており、それらの経験と非常に共通するというか同調する感覚を覚えたのである。それ以来機会あるごとに能を鑑賞してきた。省略の中にある本質の具現、内なる覇気、感情の凝縮、そういった要素が体感できるときに観客は感動するのだと思う。目ではなく、観で見るべき芸道であろう。

さて写真右は 1996 年度の明治村大会での試合風景である。この大会は全国より八段が選抜され優勝を競うものである。八段といえば当代一流最高位の剣士達で、その選士が緊迫の中で真剣勝負に挑むのである。しかしながら岩立範士の立ち姿には少しの緊張感も凝りもない、内なる覇気は感じられるものの、表に現れた姿はまことに柔和である。私のような未熟なものにはこのような上虚

能　「岩船」

シテ　杉浦 豊彦

岩立　三郎 範士の立会

明治村剣道大会にて

下実の立ち会いは至難の事であるが、その至難の境地が「美」となって具現した一例であろう。一方左の写真も同じような心地よい緊張感が観客によく伝わっていると思う。両者ともまさに体を移動する（打にでる）場面を捉えているが、双方の足の運びに注目頂きたい。まさに動中静、平常心の境地が見て取れる。仮に今日、岩立範士が能を舞っても、また逆にシテの杉浦氏が剣道をされても、どちらも十分に見るものに感動を与えるものになるのではないかと思う。

さて改めていろいろと文献を当たれば、能と剣道は非常に深い関係にあることが分かる。たとえば次のような逸話が残っている。

ある日江戸城中で能が催された。将軍家光が側に控えていた兵法師範、柳生宗矩（むねのり）に言った。

「あれなる観世左近の所作を心して見よ。そして切りつける隙ありと見て取ったならば余に申すがよい」

さて能が終わって、家光よりの下問に、宗矩はこう言上した。

「さすがは観世左近の舞に、寸分の間（ひ）（隙）もありませなんだ。ただ一度、大臣柱の方に隅をとった時、拙者（せっしゃ）の打ち込めそうな、わずかな間がございました」

一方、楽屋で観世左近が側の者に、上様の側におられた方はどなたか、と訪ねている。そして、名を知らされて、さこそと頷いた。

「隅を取ったところで、実は私は少し気が抜けてしまったのだ。あのとき、かの仁がにこりとされたのが気にかかったのだが、なるほど、音に聞く柳生但馬守（たじまのかみ）殿であったか」

おそらく、観世左近の舞に生じた、鵜（う）の毛で突いたほどのわずかな呼吸の乱れ、あるいは呼吸と姿勢とのかねあいの乱れを、宗矩の道眼（どうげん）は見逃さなかったのであろう。

柳生宗矩は元来、すこぶる能を愛したそうで、それは敬慕する禅僧沢庵から「ほどほどにしなされ」と諭されたほどであり、あまりにも熱中して稽古（けいこ）したため霍乱（かくらん）（日射病）で倒れた、という挿話も伝わっている。一つには大名歴々との交際にそれが必要だと考えたからであろうが、それ以上に能の中に剣理を学ぶ心があったからであろう。その著した伝書には、能のことばが散見されるし、姿

柳生新陰流　三学円の太刀　一「一刀両段」
1601　柳生但馬守宗厳が金春七郎のために描かせ、
巻末に署名・花押捺印している。（生駒山實山寺所蔵）

勢、呼吸についても能の道に裨益するところ大であったに相違ない。

また宗矩の嫡男である柳生十兵衛三厳は新陰流兵法の術理をその著作「月之抄」に著しているが、その中に祖父柳生石舟斎が高弟の能役者金春七郎勝氏に授けた口伝として「真の捧心」を説いている。「老父云、……まづまづ四所の専に心がくべし。敵の眼と、足と、身の内と、一尺二寸［註＝腕の肱の屈み目より拳まで］と、此四所にて知るるもの也。心のゆく所へは目をやりたく、掛からんと思えば足出るべし。心に思うすじあれば、身のふり常に替わり、見えるもの也。一尺二寸はもとより発する也。此発する所、五体の内にていづくにても捧心と知るべし」と記している。すなわち総体として敵（観客）の心の捧げられる所、発する所に心をつけよ、というのである。ちなみにこの金春七郎勝氏は、柳生流の免許皆伝のみならず宝蔵院流槍術などの武芸も修め、さらには独自の伝書も二書なす一方、若くして能の秘曲「小町」物を舞い、金春一門の勘気を被るなど、異端児でもあったようだ。

世阿弥の手になる能の伝書は二十三部遺されている。代表的なものに「風姿花伝」「花鏡」「至花道」「拾玉得花」「却来花」などがあり、能の本質論に関わるものにはそれが「花」の伝書であることを示す題名がつけられている。「花」とはその本性としての美しさ、優しさ、言い換えれば幽玄のたとえであり、能の魅力とその魅力を実現するための方策の意味である。この諸著作は剣道における諸流派の指導書においてもしばしば引用されている。また「能」を「剣道」に置き換えてこれらの著書を読むとき、まさに修行の要諦を言ったものが多数あり、現代剣道の指導においてもしばしば引用される。紙面の関係でその一例のみあげると、「風姿花伝」に「稽古は強かれ、諍識はなかれとなり」とある。諍識とは情識のことで、わがまま、身勝手な慢心を指す。慢心があれば争い心も生じ修行の

観世宗家に伝わる世阿弥自筆
「風姿花伝」巻 六　花 修

妨げとなるとの戒めである。この<ruby>諍識<rt>じょうしき</rt></ruby>は能で云えば観客を感動させてやろう、感嘆させてやろうという気持ち、剣道で云えば相手に勝ってやろうと<ruby>逸<rt>はや</rt></ruby>る気持ちといえるが、実はこれが修行の妨げとなる。各諸派の伝書も様々な形でこの所を説いている。小野派一刀流宗家 笹森　建美 氏は「一刀流仮字目録」中の「水月之事・<ruby>万水映月<rt>ばんすいえいげつ</rt></ruby>」の教えを解説して「不動の心、それは危機に臨んで心機転倒せず、しかも<ruby>邪念妄想<rt>じゃねんもうそう</rt></ruby>の去った動かない心、揺れない心である。勝とうとか、負けまいとの欲望を捨て、心の暗雲を取り去り、ただ真心をもって稽古にいそしむのでなければ得られるものではない。この不動心が養われ、そこに初めて<ruby>万水映月<rt>ばんすいえいげつ</rt></ruby>の境地を知るのである。そしてこの境地を知ったなら、相手との一体のこと、和のことに思いがいく。自分が相手の月となり水となるのである」「一刀流の究極の目指すところは円満である」と述べられている。これは柳生新陰流に云う「活人剣・<ruby>転<rt>まろばし</rt></ruby>」の極意と同じであると思う。

参考・引用文献：

「日本文化に見る呼吸の理。身息一如　剣・能と呼吸」

山本太一著　　月刊「剣道時代」　1997 年 1 月号　体育とスポーツ社出版

「柳生十兵衛　月之抄　の剣理を探る」

山本太一著　　月刊「剣道時代」　1999 年 1 月号　体育とスポーツ社出版

「五格（心気理機術）一貫　―　一刀流極意の教えを読む」

笹森　建美著　月刊「剣道時代」　1999 年４月号　体育とスポーツ社出版

「図説　日本の古典　１２　能・狂言」

小山弘志　他編　1980　　集英社

参考サイト

能楽への誘い　http://www2.ntj.jac.go.jp/unesco/noh/jp/noh_plays/2ban.html